杉洋子

# 粧刀

チャンドウ

白水社

# 粧刀

チャンドウ

杉洋子

白水社

粧刀（チャンドウ）

一九九一年一〇月一五日印刷
一九九一年一〇月三〇日発行

著者 ©杉（すぎ）洋子（よう）
発行者 藤原一晃
印刷者 山岸真純
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三（三二九一）七八一一
編集部〇三（三二九一）七八二一
振替 東京 九一三三二二八
郵便番号 一〇一

三秀舎印刷・松岳社製本

ISBN 4-560-04285-3
Printed in Japan

粧
刀

装丁　西のぼる

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

# 目次

第一章　侵略　5
第二章　異郷　49
第三章　逃亡　87
第四章　屋代島　127
第五章　祖国の船　169

# 第一章　侵略

## 一

門前で馬がいなないた。そのいななきよりも大きな声が、屋敷内に響き渡った。

「李自溶(イチャヨウ)じゃ。宗元(チョンウオン)どのはご在宅か……」

このところ梁家(ヤンガ)は人の出入りが慌しく、伽倻(カヤ)は来客の接待に追われていた。

きょうも朝から、六人の客が入れ替り立ち替り訪れ、ついさきほど、最後の客を送り出したばかりである。そのとき大門の扉は内側から固く閉ざされていた。

「また、お客人かい……」

夕餉の膳についていた下男頭の金黄永(キムファンヨン)が、箸を投げだし、伽倻をうながして立ち上った。

長さ九十間の白い土塀を張り巡らした梁家には、二つの大門があった。外門は使用人の住居である行廊棟の右端にあり、中庭に通じる内門は、石段をしつらえた立派な構えである。

客人は馬首をめぐらしては、土塀の周りを行きつ戻りつしているらしい。せわしなく揺れ動く黒い冠が、塀越しに見えた。

「自溶じゃと……。なにをぐずぐずしておる。早くせぬか」

外門の閂をはずしている金の背後で、宗元が怒鳴った。その声が聞えたのだろう。また馬がいなないた。

梁家の当主である宗元が、自ら内門を開けて客を出迎えることなど、かつてなかった。よほど大切な客に違いあるまい。伽倻は金を手伝って重い木の扉を開けた。

「宗元、そなた名をあげたの。噂は聞いたぞ」

馬上から李自溶がいった。

半年前、宗元は二十四歳の若さで大科の試験に合格した。朝鮮では、儒学を学び、文科の試験に及第した者だけが、官界で出世の道を辿るのである。

最大の難関である大科の試験に合格したことは、本人はむろんのこと、梁家にとっても最高の誉れであった。宗元の秀才ぶりは、近隣の村々にまで聞え、いずれは宮廷にあがるだろうと、人々は噂していた。その宗元が門の外へ走り出た。

「どうしたのだ。従者も連れずに……」

「釜山浦（プサンポ）に行ってきた」

馬を下りながら自溶がいった。
宗元も長身だが、自溶は六尺をゆうに超す巨漢である。大樽のような腰に金色の帯を巻き、大刀を差している。背中には半弓を担っていた。
「釜山浦に……。巡察か」
宗元が聞いた。
「それもあるが、そなたに別れがいいたくてな……」
「別れ！　どういうことだ」
それには答えず、自溶は門前にかがまった金の肩を軽く足蹴にすると、
「馬をつないでおけ」
と横柄にいった。
「へい」
金黄永が立ち上った。伽倻もつられて腰をあげた。
「おい、釜山でなにがあった」
また宗元が聞いた。
「飲ませてくれ、宗元、酒を飲ませてくれぬか」
「よし、わしの部屋で話を聞こう」

そういった宗元は、ふり向いて伽倻に命じた。
「酒の仕度を。それから風蓮にわたしの部屋に来るよう伝えなさい」
四月に入って、少し日が長くなったのか、内門へと向う宗元たちの斜め前方の空が、黄味を帯びて暮れ残っている。
伽倻は手綱を持ち、李自溶の後ろ姿を睨みつけている金をちらと見て、中庭を小走りに横切った。
宗元の部屋は、内門を入って右手の南側にあり、風蓮の住む内棟は、中庭を突っ切った東側にあった。内棟には中庭に面した一間の廊下がついている。
伽倻は廊下の端から風蓮に声をかけた。
すでに室内には灯がともっていた。風蓮は赤児をあやしているらしい。ほのかな行燈の灯をうけて、赤児を抱いた風蓮の姿が影絵のように障子に映った。
「お客さまはどなたですか?」
障子を開けて風蓮がたずねた。
「はい、李自溶さまとかおっしゃっていらっしゃいましたが」
「ああ、あのいかつい巡察使の男ですか」
風蓮は眉をひそめた。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

今年の一月に、待望の男児をもうけた風蓮は、初産のやつれもとれ、いく分肉のついた全身から、えもいわれぬ色香が漂っている。

「光仁坊(カンイン)っちゃまは、おやすみになられましたか」

伽倻は背伸びして赤児をのぞき見た。

風蓮に似て色白だ。それに生後四カ月とは思えないほど、目鼻立ちが整っていた。

「やっと寝つきました。このところの来客つづきで、この子も癇が強くなっているようです。伽倻、接待はおまえに任せます」

風蓮がいった。

「わたくしにですか」

伽倻はびっくりして風蓮を見た。

「わたくし、弓矢だけが達者なあの男は、どうも苦手です。それに旦那さまの幼馴染といっても、あの男は武官です。わざわざご挨拶に伺うことはないでしょう」

この国での武官の地位は低い。風蓮の夫が宮廷にあがれば、巡察使など、あごの先で使えるのである。

「でもそれでは、旦那さまがお困りになるのではないでしょうか」

「かまいませぬ。お叱りはわたくしが受ければすむことです。では、頼みましたよ」

風蓮はそういうと、障子をぴしゃりと閉めた。
気位の高い風蓮の性格は、子供の頃から見知っている。小作人の娘である伽倻は、七歳のときから三つ年上の風蓮に仕えていた。
慶尚北道（キョンサンブクド）の安東（アンドン）に近いこの河口村（ハフェマウル）の梁家に、風蓮が嫁いだのは、二年前の秋である。
当時十二歳だった伽倻は、風蓮に乞われるまま梁家に移り住んだ。しかし、いくら乞われたといっても、下女は所詮下女である。風蓮にすれば、使い馴れた手鏡のように、伽倻を手放したくなかっただけだろう。
伽倻は物音ひとつしない風蓮の部屋の前から離れ、台所に向った。
台所はごったがえしていた。下男頭の金黄永が、十人の梁家の使用人を叱咤している。
「若奥さまから、特別に料理の注文があったかい」
金が聞いた。伽倻は首を横にふった。
「そいつは助かったぜ」
すでに台所の板の間には、肉や野菜を盛った大皿が並んでいる。風蓮の特別な注文がなくても、客をもてなすには、十品以上の皿数を揃えなくてはならない。
「うちの旦那さまは気の短いお方だ。あんた、出来上ったはしから運んでくれ」
金がいった。いわれなくても風蓮に接待を命じられている。

伽倻は黙って膳に徳利と大皿をのせて台所を出た。その背中に金が吐き捨てるようにいった。
「あの豚野郎、よっぴて飲むつもりだぜ。あんたもそのつもりで、適当にしておきなよ」

## 二

「倭が攻めてくるだと。ばかな……」
宗元の怒声が聞えた。
伽倻は部屋の前で声をかけて襖を開けた。
十畳の部屋の正面には屏風が立てられ、宗元たちは中央に置かれた卓袱台を挟んで、向き合って坐っていた。
「いまの話は本当なのか」
宗元が伽倻をちらと見ていった。
灯芯が短くなったのか、燭台の灯が消えかかっている。伽倻は灯芯をつまみ落し、それから卓袱台に大皿を並べた。
「わしは嘘はいわぬ。釜山浦の倭館に、いま倭人はひとりもおらんぞ」
「対馬へ引揚げたのか」

「ああ、それもひとり去りふたり去りと、気付いたときには、もぬけの空だったそうだ。小女、酒を注いでくれ」

自溶がいった。宗元は酒をたしなまない。伽倻は小皿に料理をとりわけ、自溶の盃に酒を注いだ。

「ほう、冷麺か。わしの大好物じゃ」

麺の上にのせた鶏肉をほおばりながら、自溶は徳利を手もとに引き寄せた。手酌でないとまどろこしいのだろう。伽倻は、もう一本の徳利を自溶の前に置き、膳を持って立ち上った。

外はすっかり闇に包まれていた。金が気配りしてくれたのか、普段は使わない軒行燈に灯がともり、足もとを照らしている。伽倻は沓脱石（くつぬぎいし）の草鞋を突っかけて、台所へと取って返した。

「あっちの様子はどうだい」

板の間に腰掛けた金が、表のほうにあごをしゃくりながら聞いた。左手に大ぶりの茶碗を持っている。客用の酒を盗み飲みしているらしい。

「倭が攻めてくるのですって……」

「倭が……。あいつがそういったのか」

「ええ、旦那さまは信じていらっしゃらないみたいだったけど、釜山の倭館にいた倭人が、みんな対馬へ帰ったそうよ」

台所には煮物の匂いや、もち米を蒸す匂いが立ちこめている。伽倻は大徳利に酒を移しかえながら、松の実に蜂蜜をたっぷりつけた菓子を、一つつまんだ。

「あんた腹が空いているんだろ。どうせ、あいつら喰い散らかすだけだ。もっと遠慮せずに食べなよ」

茶碗に酒を満たした金がいった。

「あとで頂きます。それより金さん、あまり飲まないほうがいいわ」

梁家の当主である宗元と金は、同い歳だと聞いている。しかし、日焼けした顔に深く刻まれた皺のせいか、五歳は老けて見えた。

「あんたは知らないだろうが、夜空に長星が現れたり、漢江（ハンガン）の水が血を流したように赤く濁ったり、国が滅びるという噂は、先頃から巷に流されているんだ。都では夜毎、若者たちが踊り狂っているらしいぜ。倭が攻めてこようが、国が滅びようが、おれたちの知ったことではないが……」

金がいった。ろれつが少々怪しくなっている。長星とは彗星のことで、この星が現れると兵乱が起ると人々は信じていた。

「そんな流言に惑わされるなんて、どうかしてるわ」

伽倻は金の傍にいた女に大徳利を手渡し、一緒に来てくれるように頼んだ。

「国が滅びるだなんて……金はあんたに気があるのよ。それだけよ」
大徳利を胸に抱えこんだ女がいった。伽倻より二つ年嵩だが、気のいいだけの女であった。
「転ばないでよ。足もとに気をつけてね」
中庭には百を越すキムチの甕が、土の中に埋められている。
「ほんとなんだから……あんたのことばっかり聞くんだから」
「ありがとう、もういいわ。ここからはわたしひとりで運ぶから」
伽倻は濡縁に膳を置き、大徳利を受け取って女の肩を叩いた。
細目に開いた襖のすき間から、一筋の光が洩れている。なにやら声高な宗元たちの話し声も聞えた。
伽倻は部屋の中にすべりこんだ。
「もし、来るとすれば五百か？　それとも六百くらいか……」
「五百？　そんなものではない。小舟で倭寇が攻めて来たときとは、訳が違うぞ」
どうやらふたりは、襲来するかも知れない倭の兵数を語り合っていたらしい。
伽倻は後ろ手で襖を閉め、そっと卓袱台に近づいた。卓上の料理は、喰い散らすどころか、あらかたなくなっていた。二本の徳利も空である。
「風蓮は、まだ支度ができぬのか……」



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.